

ブックカフェのある街

前野久美子 編・著





目次

第一部 ブックカフェの小さなドア

前野久美子

イントロダクション 8

火星の庭物語 9

私が出会ったブックカフェ 68

第二部 街と人と本と

イントロダクション 108

一 街のなかの本の風景

〈いろいろなブックカフェ〉

書本 & cafe magellan(マゼラン)・高熊洋平

インタビュー・文／大泉浩一

115

stock(ストック) gallery & atelier・吉岡英夫

インタビュー・文／大泉浩一

122

〈本をつくる人に会う〉

圭書房・留守晴夫

インタビュー・文／高熊洋平

130

アトリエ葉・岡田とも子

インタビュー・文／前野久美子

140

仙臺文化・渡邊慎也

インタビュー・文／前野久美子

149

〈夜の文学散歩〉

案内人／佐伯一麦

157

二 街のなかの本の記憶

文学のかけらを探して、まち歩き

文／西大立目祥子

173

仙台を通過した作家 「岩野泡鳴」

漫画／佐藤純子

185

江戸時代の仙臺を生きた只野真葛という女<sup>ひと</sup>

文／早坂信子

191

俳人・佐藤鬼房と塩竈

文／関根かな

203

コラム 尾形亀之助

189／菅原克己

201／古山高麗雄

213

文／荻原魚雷

あとがき

215



第一部

ブックカフェの小さなドア

前野久美子

〈イントロダクション〉

こんにちは。book cafe 火星の庭はカフェのある古本屋で、宮城県仙台市にあります。これから本のなかではありますが、小さなブックカフェ、火星の庭をご案内いたします。

まず、火星の庭ができるちょっと前から現在までのご紹介。はずかしながら、計画性のない人間が突然思いついたブックカフェの悲喜劇をまとめてみました。すみません、カフェなのにまったり、ゆるやかでなくて。

後半は火星の庭をはじめずっと前のお話。二十年以上前のことですが、この年月がなければ火星の庭は生まれなかったので振り返ってみました。こちらは海を渡る長旅です。

内容はどちらかというと、お店や場所を持つことに関心のある人向けかもしれません。でもそのわりにあんまり参考にならないそうですが。バカな奴がいるなあと笑っていただければ幸いです。

それではどうぞ、いらっしやいませ！。

## 火星の庭物語

### ブックカフェをやる

一九九九年の暮れも押し寄せまった頃、ブックカフェをやるかと突然思い立った。

前日に本屋のアルバイトを辞めたばかりだった。夫のケン（健一）はフリーの映像作家になって三年目。しかしここ半年くらい仕事がない。勤めていた本屋を出て、公衆電話からケンに電話をかけた。「バイトやめた」「そうかあ、大変そうだったもんね。お疲れさま」

これで夫婦二人とも無収入に近い状態になるが、切羽詰まった空気はなかった。むしろ少しのんびりできるねと言っていた。

バイトを辞めた理由は社長と喧嘩をしたから。その日の朝出勤すると、後輩の女性アルバイトが「クビって言われた」と泣いている。理由がわからないので社長に聞きに行くと、「言うことを聞かないから」という答え。「じゃ私も辞めます」と咄嗟に口から出て、二人で

店を後にした。本屋の仕事に就いて二年が経ち、楽しくなってきたところだったけれど、本への愛着がまるでなく、店をおもちやのように考えているオーナーの元では、いつかこうなると思っていた。

次の日「どうしようね。うちには貯金もないし…」とケンが言う。「次も本屋の仕事がしたいな。今度は古本屋がいい。◎◎◎書店に電話してみようかな。……ちよつと出かけてくるね」一人借家を出た。ふいに足が向いたのは、以前働いていた出版社カタツムリ社だった。ここは「ぐりん・ぴいす」というエコロジーショップになっていて、そのなかにカタツムリ社はあった。どちらも経営者は加藤哲夫さん。現在はせんだい・みやぎNPOセンターの代表理事をされている。

哲夫さんは一九八一年に、出版社カタツムリ社を一人で立ち上げ、食品の安全性などが騒がれ始めた一九八五年に「ぐりん・ぴいす」を開業、さまざまな市民活動に場を提供し、関わり、支援をしてきた。今でこそ社会貢献に積極的な会社は日本でも珍しくなくなってきたが、カタツムリ社の場合、社会活動のために会社をやっているのではないかと思うほど、哲夫さんの理念は高く、また実際に社会活動と経営を見事に両立させていた。（加藤哲夫さん

について数行で書き表すのはとても無理なことです)

ドイツから帰ってきて迂余曲折があった後、本屋で偶然手に取った雑誌でカタツムリ社を知り、どうしても働きたくなって、長文の手紙つきの履歴書を送った。運よく採用していただき二十三歳から二十八歳までの五年間働くことができた。転職をくり返した私のお勤め期間最長である。ここでの時間は大学を出ていない私の唯一「勉強した」といえる歳月だった。哲夫さんは店の奥の三畳ほどのスペースに、本に囲まれてパソコンに向かっていた。衝立のように積まれた本の隙き間から覗いて話しかける。

「こんにちは。本屋の仕事辞めちゃいました。今度は古本屋で働こうと思っています」  
「おー、久美ちゃん。古本屋やるって？」体はパソコンに向かったままほころんだ顔をこちらに向ける。

「いえいえ。できれば◎◎◎書店で働きたいなと考えています」

「久美ちゃん。もう勤めるのはやめて、自分でやったらいいんじゃない？」背が高い哲夫さんは立ち上がると本の衝立てから顔が出る。

「えーっ、いつかやるにしても修業しないと。まったく経験がないのは…」

「久美ちゃんがやりたいお店は、○○○書店みたいなの？」

「いいいえ、そんな大きなお店はできません」

「休業ってどのくらい？」

「五年、くらい。ん、もつとかな」

「五年たっても十年たってもほんとうに大事なことは教えてもらえないよ。そのうちお店をやりたい気持ちも萎えちゃうから」

「はあ、そうでしょうか」

「久美ちゃんがやりたいようなお店はどっかにあるの？」

「……ない、です」

「でしょ。じゃ、はい。これ読んで。はじめちゃいなよ」

「はい。わかりました」

渡されたのは『街の古本屋入門』という本だった。小さなソフトカバーの本。なぜ、あの膨大な本の山から、すっと手に取れる場所にこの本があったのか、今でも謎だ。ともかく近くの喫茶店に入り『街の古本屋入門』を読み終えると、急いで賃貸情報を買ってきて、めぼ

しい店舗物件に印を付けていた。スイッチが入ってしまった。次の日から怒濤の不動産屋巡りがはじまった。ちなみに哲夫さんは「本だったら、私の持っている本をいくらでも寄付するから」と言ってくれたが、それは実現しなかった。古本屋をやりたかったのは、哲夫さんの方だったと後で知った。

### 見通しゼロのスタート

オープン準備からオープン後二年くらいのことを思い起こすと、顔を覆って突っ伏したくらい悲惨な自分達がいる。「あ、ダメ！ そんなことしちゃ」「違う。力の入れるところが！」と、記憶に突っ込みを入れずにおれない。何もかも知らな過ぎたからできたことだと今は思う。ああ違うや。オープン後五年くらいまでやばかった。んー、しかし去年でも消し去りたい失態は多いな。いつまで経っても未熟である。そうして十年が過ぎてしまった。とほほ。

十一年前に戻る。古本屋で働くつもりが開業することになって、賃貸情報を片手に借家へ帰ってきた。台所で晩ご飯の準備をしているケンに言う。「ブックカフェやることにした」

豚汁の匂いがする。